

# 會津八一はアジアに通用するのか —李銘宗著『會津八一最後の十年間』をめぐって—

孫 犁 冰

Has the Thought of AIZU Yaichi Gained General Acceptance in Asia?  
—With reference to the Last 10 years of AIZU Yaichi, written by LI Mingzong—

SUN Libing

會津八一（1881-1956）は「秋艸道人」、または「渾斎」と号し、東洋美術史学者であるとともに、歌人であり、書家でもあった。會津八一による『新潟日報』の題字と共に、秋艸道人による歌の解説が掲載されている。私が會津八一をもっと知りたくなったきっかけは、李銘宗の著書『會津八一最後の十年間』（秋芳會2011年8月1日）である。この一冊は台湾最初の會津八一研究である。

## 一、台湾最初の會津八一研究について

著者李銘宗は、1956年台湾生まれの書家であり、新潟大学美術教育修士、華梵大学東方人文思想所文学博士、ご専門は思想史と美術史であり、秋艸会の会員である。中国語繁体字版の『會津八一最後の十年間』が出版された日は2011年8月1日であり、會津八一誕生130年の日でもある。李銘宗が會津八一に出会ったのは、吉野壯児による春秋社に再版された『秋艸道人會津八一』の前書きであった。父親である歌人吉野秀雄が1925年春、高崎で療養中に、『木星』という雑誌に偶然「村莊雜事」を読み、「世の中にこのような詩魂があるなんて」と感銘を受け、すぐに『南京新唱』を入手して読誦に励み、翌年4月に會津八一に手紙を送り、以降、會津八一の短歌における唯一の弟子となったという逸話があった。

1991年、李銘宗が新潟會津八一記念館で會津八一の書簡と初対面した時、吉野秀雄と同様に大きな衝撃を受けた。以来、東京の古本屋で會津八一関連の書簡、墨跡、文献史料および関連著述を蒐集し、調査のため何度も新潟を訪れ、會津八一ゆかりの方々と交流を重ね、20年間も研究に情熱を注いだ。

## 二、會津八一最後の十年間について李銘宗の評価

李銘宗が序章の中で會津八一を次のように評価している<sup>1)</sup>。

「明治、大正、昭和をわたり、新思潮を代表する学芸家の中に、1名を選ぼうとするなら、秋艸道人會津八一が典型的な代表人物であることは疑う余地もない。道人と同じく越後出身の良寛禪師は、和歌、漢詩、書道における江戸末期の第一人者であると称えられ、その名声も影響力も今日になっても衰えない。一方、道人が没後50数年にも経つが、その評価がますます高まり、良寛と並んで“越後双璧”

といってもよい。道人が切り開いた歌、書、美術史の研究は、与謝蕪村や良寛の領域と系譜を超越し、独り歩きをしながらも新たな研究分野を開拓し、創作の新模範を作り出した。」

さらに、李銘宗が終章において、以下のように述べている<sup>2)</sup>。

「道人は“学芸”を兼ね備える典型である。“学”とは、学問であり、“芸”とは“芸術”を指す。二つの全く異なる分野を同時に扱い、同時に極めた。道人の時代では、多くの学者が東洋を知って西洋を知らず、または西洋に憧れて日本を知らずという状況であった。普通の芸術家は学問を知らない一方、学者は芸術を知らなかった。道人は師や友の導きがあったが、殆ど独り歩きをしながらも独自の体系を築きあげた。芸術に関して、歌人、書家として、“澄みきる”歌風と“独り歩く”書風を樹立した。歌と書が交錯往来をして、孤高を持しながらも雅を極めた書道の美を表現した。道人の短歌が広く詠まれ、歌と書が美を備え、人々は心を奪われる。

さて、李銘宗が目した「會津八一最後の十年間」とは、昭和20年(65歳)～昭和31年(76歳)の最後12年間の「新潟時代」を指し、「最後の十年間」と略している。これは道人にとって、苦難の時代でもあれば、芸術の集大成の時代でもある。李銘宗がまとめた會津八一最後の十年間の年譜は主に以下の通りである<sup>3)</sup>。

和年号	西暦	年齢	月日	内 容
昭和21年	1946	66	3月	京都大丸にて個展。
			5月	坂口献吉の要請を受け、夕刊新潟社の社長に就任。
			10月	長岡互尊文庫にて「文化の意義」を題し講演。
			11月	新潟市役所にて「文化の意義」を題し講演。
昭和22年	1947	67	4月	短歌『寒灯集』を刊行する。
			5月	書画図録『遊神帖』を刊行する。
			6月	新潟小林百貨店にて「近作書画展」。
昭和23年	1948	68	5月	早稲田大学名誉教授となる。
			10月	早稲田大学文学部特別講義「上代美術史の文献学的研究」。
			12月	「薬師寺東塔の銘文を読む」を『天平』第3号に発表。 早稲田大学會津博士記念館東洋美術陳列室が早稲田大学図書館旧貴賓室にて開室
昭和24年	1949	69	1月	「新潟随想」を新潟ラジオ放送にて放送。
			3月	新宿中村屋にて書画個展。
昭和25年	1950	70	1月	新潟日報社の社賓となる。「夕刊ニイガタ」が新潟日報社に合併される。
			2月	「現代の書道」を『中央公論』に発表。
			3月	平泉へ津田左右吉を訪ね、仙台鉄道会館にて『書道の諸問題』を題し講演。 新宿中村屋にて、會津八一先生古稀祝・渾齋道人美術展覧会を開催。
			8月	新潟県立図書館に歌碑を建てる。
			9月	唐招提寺に歌碑を建てる。
			10月	東大寺に歌碑を建てる。
			11月	盛岡市川徳百貨店にて書画展(吉野秀雄との二人展)
昭和26年	1951	71	1月	新潟市名誉市民におされる。 東京壺中居にて書画個展。 『會津八一全歌集』を刊行(中央公論社)。
			5月	『會津八一全歌集』により第2回読売文学賞を受賞。
			11月	早稲田大学文学部特別講義「東洋文芸雑考」。 新潟大学にて「文学者の修行」を題し講演。
昭和27年	1952	72	5月	新潟川端町生粋別館にて個展。
			10月	東京壺中居にて書入陶器展。
			12月	NHK「声の図書館」のために録音。題は「秋の空」。

和年号	西暦	年齢	月日	内 容
昭和28年	1953	73	2月	宮中歌会始の儀に召人として臨席する。
			3月	NHKラジオ「趣味の手帖」の時間に「奈良の思ひ出」について放送。 聞き手は亀井勝一郎。
			10月	『自註鹿鳴集』を新潮社より出版。
			12月	東京大丸にて近作書道展。
昭和29年	1954	74	5月	安藤更生博士号請求論文『鑑真大和上傳の研究』に関する審査要旨を書く。
			8月	杉本健吉と合著の書画集『春日野』を文藝春秋新社より出版。 東京銀座松坂屋にて「春日野」の展覧会を開催。
			10月	早稲田大学會津博士記念東洋美術陳列室（通称會津記念室）を移転し 再開する。
			12月	東京・中央公論画廊にて近作書画展。
昭和30年	1955	75	5月	歌集『春日野の歌』を青々社より出版。
			6月	東京上野松坂屋にて近墨展。
			11月	香川県木田郡牟礼町にて、五剣山八栗寺鐘銘に揮毫する。 北方文化博物館新潟分館にて歌碑を建てる。
昭和31年	1956	76	1月	「八栗寺鐘銘」を新潟日報に発表。
			8月	新潟市萬松堂画廊にて個展。
			11月21日	永眠。戒名は生前に自撰した「渾齋秋艸道人」、墓は新潟市の瑞光寺に ある。

### 三、道人の奈良への憧れについて

以下、本書において、道人の奈良美術に魅せられていく動機を辿り、さらに研究的視野を拡げた過程を要約しておこう。

道人は奈良美術に触れたのは学生時代であった<sup>4)</sup>。明治35年（1902）4月に東京専門学校高等予備校に入学し、翌年9月に修了し、早稲田大学文学科（英文学専攻）に入学した。当時の早大には志の高い文学青年が日本各地から集まっていた。その中に、道人を奈良美術へ導いた二人の人物がいた。木内辰三郎と淡島寒月であった。木内辰三郎は道人の同級生だった。東京の向島に住んでおり、家は代々有名な大工さんであった。辰三郎の父親の木内半古は明治政府に勲賞され、奈良と京都の古社寺の調度品調査を企画した。辰三郎の祖父の木内喜八は一代の名匠であり、幸田露伴の名作『五重塔』に登場する主人公大工十兵衛のモデルでもある。辰三郎の弟の木内省古が父親の木内半古に伴い、宮内庁の正倉院文物の整理、修復、複製等の作業に携わっていた。木画や木彫りなどの技法の復元は、喜八から、半古、省古へと木内家三代にもわたる心血の結晶であった。大学時代に、道人がよく木内家を出入りし、様々な工芸品、彫刻品が至る所にあり、さらに、本物そっくりな正倉院文物のレプリカもよく目にした。日本美術の香りが漂う木内家は、まさに道人が日本伝統美術に開眼した場所でもあった。

辰三郎の引き合わせで、道人が梵雲庵の住人である淡島寒月（1895～1926）と知り合いになり、以降梵雲庵の常連になった。寒月は江戸末画家淡島椿岳の息子であり、日本橋出身、趣味人として書画や骨董品のコレクターであった。家中に書画や骨董品が溢れ、足の踏み場もない。また、絵に長けており、画名高い風流人でもある。淡島寒月はよく夕方近所の温泉に入り、湯上がりした後、そのまま関西に向かって旅に出たりする。一回の旅は一、二ヶ月で、関西に行く折に必ず奈良を訪ねた。当時興福寺南門前の猿澤池付近に、写真師工藤利三郎が開いた「工藤写真館」があった。店内の奈良に関する写真がいつも淡島に買い占められた。道人が淡島の梵雲庵を訪れると、写真から奈良美術に覗き、触発され、後

に奈良への旅につながった。

興味深いことに、昭和28年（1953）3月5日から7日に放送されたNHKラジオ番組『趣味の手帖』における道人と亀井勝一郎との対談が紹介されている。その時、道人が次のように語っている。

「はい。全く私は奈良に関する知識がありませんでした。何となく憧れを持ったのは、私の先輩ですけれども、先輩ということをいつも許さないで、友人にしてもらいたいと言った淡島寒月という人。私はよくその家に行きますとですね、厚さ四寸ぐらい、POPで焼いた古美術の印画がありましてね、それを経机の下へ積みあげてあるのを、それを時々引き出して私は見せてもらったということが、私の奈良趣味を非常に誘ってくれたのではないかと、今さら思うんです。淡島という人は、これより先奈良に行き、写真を買ったばかりでなく、方々見て歩いて、その時一人の友達を得た。その人に必ず奈良に行ったら会ってくれろと言われて、それが一つの契機になった。」

#### 四、道人初めての奈良の旅——麗しさと哀愁について

道人は明治41年（1908）に初めて奈良を訪れた<sup>5)</sup>。7月31日夜、列車に乗り新潟県板倉村を発ち、8月1日に東京に着き、4日夜、大阪の伊藤俊光宅に泊まった。6日から14日にかけて、東大寺仏殿、春日野、新薬師寺、春日若宮、若草山、法華寺、秋篠寺、西大寺、法隆寺、法輪寺、法起寺等を見学した。その後、大阪に戻り、また京都へ、14日に金沢に着き、また高岡を経由し、伏木から船で直江津に向かい、また列車に乗り換えて18日夕方に板倉村に戻った。

東大寺仏殿は明治30年（1903）から大規模な修繕工事が始まった。料治熊太が『會津八一の墨戯』の中ではこのように記した。「南京新唱余情」には当時工事中の大仏殿の写真が一枚あった。工事用の足場が周りを囲み、写真の下に「先生が最初に見た東大寺の姿」という説明が書かれていた。

工事の大きさから人間の小ささが見えてくる。道人が工事現場で拝見した大仏は、天平時代の荘厳さと栄光が依然として健在し、道人の胸に深く刻み込まれた。当時、相前後して東大寺西側転害門近くの「対山楼」と法隆寺夢殿近くの「かせや」に泊まった。宿「かせや」に泊まった夜中に、初めて機音が聞こえてきた。「法隆寺村にやどりて」を詠んだ。

いかるが の さと の をとめ は よもすがら  
きぬはた おれり あき ちかみ かも

法隆寺の別名は斑鳩寺である。その意味は、「徹夜をして斑鳩村の娘の機織りの音が聞こえてきて、恐らく秋が近づいてきたのである。」奈良の美しい景色と千年古美術の魅力に道人が感動極まりなかった。

大正10年8月（1921）、安藤更生、山田正平、吉武正紀らを伴い、奈良へ行った。東大寺、新薬師寺、法隆寺等を訪ね、奈良では花芝の吉澤屋に泊まった。さらに、橘寺、室生寺、大野寺等に行った。

大正12年10月（1923）、小川晴暘の写真集『室生寺大観』を発行するため、飛鳥、室生の諸寺院を訪れ、写真師の工藤利三郎との交流が深まった。弟子安藤更生が『南都逍遥』の「奈良雑記」の中で、工藤氏が道人を気に入って、婿入りをしてほしいと言っている。大正13年12月（1924）に刊行された第一歌集『南京新唱』に、淡島寒月の絵「木の葉猿」が掲載された。八一と寒月の知己の関係を露にした。

大正12年9月1日に関東大震災が起こり、梵雲庵が火事に焼かれ、寒月の随筆原稿や収蔵品も難を免れなかった。道人が「淡島寒月老人に」、このように詠んだ。

わが やど の ペルウ の つぼ も くだけたり  
 な が パンテオン つつが あらず や

パンテオンは万神殿を意味し、万神殿の主人のご無事は何よりである。珍重した骨董品が全部焼失したにしても、生命が無事なので安心したと、寒月を慰めた歌である。

## 五、道人の奈良美術視野への軌跡

近代日本の本格的な美学・芸術学の研究において、早稲田大学が有名な先駆者である人物を輩出した<sup>6)</sup>。例えば、坪内逍遙の『小説の神髓』は、小説に独立した芸術的価値を賦与し、日本で最初に体系的な文芸理論視野を拓いた。島村抱月が演劇革新運動を巻き起こし、西洋近代演劇の推奨に力を注ぎ、生涯自然主義文学運動に貢献し、特に氏の主宰した「早稲田文学」は影響力が大きい。

會津八一は早大芸術学研究の二代目となる。早大在学中の明治38年（1905）2月、法隆寺再建・非再建をめぐる、論争が白熱した。主な論点は『日本書紀』天智天皇9年（670）4月30日の記述によると、法隆寺が焼失され、今日聳え立つ法隆寺西院伽藍は天智天皇9年焼失後に再建されたものである。論争の前に、歴史学界が『日本書紀』に従い、「再建説」を認定した。一方、建築史研究者が実物に基づき、建築物本来の様式論について一連の批判を行った。両説の論争が始まった。

「非再建説」は、主に建築史学者関野貞博士の建築様式および尺度論を中心とした。同時に干支一運説を発表した東京美術学校出身の彫刻家平子鐸嶺も「非再建説」を主張した。「非再建」と「再建」は一字違いではあるが、それが西暦670年以前の建築物であるか、それとも西暦670年以降の建築物であるかは建築史研究者にとって、日本建築編年の位置づけにかかる大問題であった。関野氏は東京帝国大学を卒業し、内務省技師、奈良県技師を歴任し、県内350余りの古建築寺社の実地調査に携わった。まず、法隆寺建築は古代建築の具体的な様式論典型であることを掲げ、同時に、日本古代の二つの尺度、高麗尺と唐尺の存在を発見した。最後に、法隆寺は推古天皇15年（607）に建てられた古式建築であると推定し、「非再建説」を力説した。

上述した関野氏による実証の研究手法論は、道人が大正15年7月に『早稲田大学新聞』に掲載した「実物尊重の学風」、および昭和2年10月22日、早稲田大学大隈講堂での公演「実学論」と一致した。特に、関野氏の実証の研究手法論は一般論による『日本書紀』の記述を否定したため、一躍有名になり、学界の注目の的となった。一方、平子鐸嶺の干支一運説も当時にとって新たな視野であった。『史学雑誌』編集委員の濱田青陵は、関野、平子両氏の「非再建説」に対して、「本国美術史界の一大難題を解決した」と賞賛した。濱田氏の高い評価は、史学界の再建論者にとって大きな衝撃と挑戦であった。案の定、法隆寺研究と関係なかった歴史学者の喜田貞吉博士がまた「再建論」を掲げ、登場した。最後に、法隆寺建物は天智天皇9年（670）に焼失され、和銅年間（708～714）に再建されたと推論した。

以上、明治38年法隆寺再建・非再建をめぐる論争を要約した。

考古学者濱田青陵が上述した関野、平子等の実証と科学の研究論域に高く評価した。濱田青陵は頭角を現した早熟した考古学者であった。道人が昭和14年2月23日の「濱田先生追悼録」に以下のように記した。

「学者として又は学校行政家としての濱田君の業績や手腕については、今私が事新しく云ふまでも無い。人間としての濱田君は快活で、多趣味で、自由で、そして闊達で、しかも一面には随分細かな事に

もよく気の附く苦勞人であった。学者としては稀な人柄と云ひ得る。濱田君の偉いところは此所にあるのであらう。此の人を失った私の寂しさは云ふまでも無いが、京都の人々の慨きを私は同情に堪へない。」

濱田氏はかつて京都大学総長を務めた行政専門家であり、考古学に精通し、日本考古学の科学研究の基礎を固め、京都大学考古学研究のリーダー的な人物でもあった。『通論考古学』、『考古学入門』、『東アジア考古学研究』等の著書がある。

道人が大正末、昭和初期に掲げた「実物尊重の学風」や「実物論」は、濱田氏考古学の科学研究に啓発され、奈良美術研究の方法と進路に取り込んだ。大正15年5月に濱田青陵が上梓した『百済観音』の題字は道人によるものであった。

昭和4年11月(1929)、道人の奈良研究に関する最初の論文「正倉院に保存さるゝ公験辛櫃について」は『東洋美術』特集「正倉院の研究」に発表された。これにより、道人が濱田氏に同調し、追隨しながらも科学研究の実学路線を貫いたことが窺える。特に上述した『百済観音』、『考古遊記』は、表紙と背表紙の題字、著者名、出版社名が全部道人自ら書いたものであった。数多くの題字のなかでは珍しい例であり、両者の友情の深さが窺える。

昭和4年3月頃、道人が「東洋美術研究会」を立ち上げ、同会事務所を奈良市水門町に設けた。同年4月に濱田青陵、天沼俊一、春山武松、安藤更生、小川晴暲らとともに、古美術研究誌『東洋美術』を飛鳥園より刊行した。創刊号に道人が「中宮寺曼荼羅に関する文献」を掲載した。以降、『東洋美術』に次のように奈良美術に関する論文を意気揚々と相次ぎ発表した。

1. 「法隆寺金堂阿弥陀仏像に関する文献」、『東洋美術』2号、昭和4年6月。
2. 「正倉院に保存さるゝ公験辛櫃について」、『東洋美術』3号、昭和4年11月。
3. 「南都七大寺日記の述作の年代を論じて法隆寺金堂四大天王像の移入に及ぶ」、『東洋美術』4号、昭和5年1月。
4. 「法隆寺の六体仏並に白檀地藏像の伝来を論じて再び四大天王像の金堂移入に及ぶ」『東洋美術』5号、昭和5年5月。
5. 「興福寺の華原岩について」、『東洋美術』6号、昭和5年7月。
6. 「南都七大寺巡礼記の述作年代について」、『東洋美術』7号、昭和5年9月。
7. 「公験辛櫃論後記」、『東洋美術』8号、昭和6年1月。
8. 「法起寺塔露盤銘文考」、『東洋美術』9号、昭和6年4月。

昭和4年4月『東洋美術』創刊号から、昭和6年4月までの二年間、奈良美術に関する論文を計9本発表した。そのうち、8の「法起寺塔露盤銘文考」が先に昭和6年3月に『東洋学報』第19巻第1号に発表したほか、全部初公開であった。道人の旺盛な行動力と高い志が窺える。『続渾斎随筆』に収録された「濱田青陵君のこと」には次のように記された。

「大正10年の冬から翌春へかけて私は九州の石仏を觀て歩いた。そしてその年の8月から中学の教頭を廢めた。その頃の学界では、白杵の石仏を白鳳だとか、天平だとか、弘仁だとか云ひ囃して居た。私は其等に反対し断然鎌倉を主張して、ひそかに社中の人々に此の意見を述べたりして居た。恰度其頃濱田君も私の巡った跡々と巡らせて、行く先々で私の名刺を見たとか噂が出たとかいふことを、非常に懐かしげに、旅行中から便りを寄せられたのみならず、帰来京都大学で、あの周到な報告書を作られる際にも、慇懃に書面を寄せて、此等の石仏に対する私の意見を、其の報告書の中に採録したと云ふことで

あった。しかし其頃私の方でも別に発表の計画があった為に、遺憾ながら此の雅量と好意との籠った勧誘に応じられないことを申し送ると、そんならせめて和歌でもいゝからと云ふことであつた。が残念ながら私には御目にかけられるやうな石仏の歌が一首も無かつた。今でも私は此の時の気持ちを折々思ひ出す。」（「濱田先生追悼録」昭和14年10月）

道人が大正10年11月から翌年2月まで九州と奈良を訪れた。「白杵石仏」とは、大分県白杵市上野元町の磨崖石仏群を指し、大日如来、釈迦三尊像、地藏十王像等70尊余りがあり、平安後期から鎌倉時代までの作品であつた。道人が大胆に鎌倉時代（1183～1333）の作品だと断言したのは、慧眼を持った41歳の時であつた。道人はほかの発表計画があると言い、濱田氏が報告書の中に自分の意見を取り入れることをやんわりと断つた。明らかに濱田氏と競う意欲があり、石仏の短歌は一首もないとは、やはり言い逃れであつたと思う。

大正10年10月から11年2月に作った『放浪吟草』に、「大分市外上野の石仏をみて」という白杵石仏を描写する短歌があつた。

ひびわれし いし の ほとけ の ころもで を  
つづりて あかき ひとすぢ の つた

磨崖石仏の袖の裂け目から、つたが生えてきて、その蔓が鮮やかな赤色で眩しく、荒涼の雰囲気を出し出すことを意味する。短歌があるのに、一首もないと言い逃れることは、ライバルとして濱田氏を意識しているが、終生の友人であることが窺える。

## 六、道人の美への理想

それでは、李銘宗が會津八一の美への追求について、どのように評価しているのだろうか<sup>7)</sup>。

「奈良は道人の魂の故郷であり、創作と美術研究の原動力の源泉でもある。東京にいても、新潟にいても、南都である“奈良”を終始憧れを抱き、まるで理想郷のギリシアのようである。故郷を遠く離れるほど、望郷の気持ちが湧き上がり、道人の古代に対する憧れと理想がギリシア文化研究や、ジョン・キーツ研究、そして奈良美術研究へ発展し、さらに東洋美術研究の中心を貫き、“獨往”という研究スタイルに昇華した。道人が日本海を吟詠しながらも、脳裏に浮かんだのはエーゲ海の天空であろうか、それともハイネが詠む北海の風雪であろうか。巻を閉じて思いを馳せると、ただ天空を駆け巡る風の声が聞こえてくる。」

学問に関して、道人が奈良美術の研究に励み、奈良美術の本質から東京美術の奥義を探求した。1908年、道人が初めて奈良を訪ね、以降二年間にわたり大量の文献を読みこなし、奈良（東洋）美術研究に没頭した。一方、道人が小泉八雲に導かれて、英国文学という世界にのめり込み、ジョン・キーツ研究をテーマに卒業論文を完成した。以降、道人がギリシア文化や東洋美術の研究に夢中していたのも、完全に小泉八雲の影響によるものである。道人が小泉八雲に師事したのは僅か半年であつたが、「一生の師」として崇めながらも従っていた。道人のギリシア美術という視野が小泉八雲によって啓発され、ギリシア美術の普遍性から転じて、奈良美術研究に託し、両者の共通性を模索した。形式から本質まで奈良美術の真の価値を見出し、奈良美術研究に関する不動な地位を確立した。以上の点において、道人の独創性を特に評価している。

## 七、會津八一の精神が蘇る今日

李銘宗は、本書で會津八一の奈良美術研究と同時に、奈良での旅のいしぶみとしての歌集を高く評価している。

米国の日本文学研究者マイケル・マルラ（UCLA教授）が、「哲学者和辻哲郎の『古寺巡礼』とともに、會津の歌集『鹿鳴集』は疑いもなく、20世紀の奈良に最も大きな影響を与えた著作である。出版されるや、たちまち人気となった會津の歌集は、古都の遺跡を保存しようというかれの努力と相まって、奈良を近代における文化的アイコンとする上で、大いに貢献したのである。」と評価している。

會津八一自身も『南京新唱』の序文にこのように述べている。

「われ奈良の風光と美術とを酷愛し、其間に徘徊することすでにいく度ぞ。遂に或は骨をここにうめんとさへおもへり。ここにして詠じたる歌は、吾ながらに心ゆくばかりなり。われ今これを誦すれば、青山たちまり遠くめぐり、緑樹薨に迫りて、恍惚として、身はすでに舊都の中に在るが如し。」

2012年2月現在、奈良県下には、會津八一の歌碑が全部で17基も設置されている。道人が『新潟日報』に「私の歌碑について」次のように述べている。

「（中略）私などの歌でも、石に彫るからには、保存さえよければ、優さに千年あまりの後までも伝はる。それが上手だとか下手だとかといふのではなく、遣りさへすれば、だんだん値打ちが出て来るのにちがひない。」



写真左から、神林恒道、篠田昭、荒井正吾、松岡正剛。

(2012年2月17日、奈良まほろば館にて、撮影：孫犁冰)

2012年2月17日、奈良まほろば館（東京日本橋）において、會津八一の功績を媒介として交流してきた奈良県と新潟市による「歴史・文化交流協定」調印式が行われた。幸運にも、評者がこの調印式に立ち会う機会を頂き、感慨無量。本協定により、新潟市と奈良県は互いの歴史的、文化的なつながりについて研究情報を交換し、交流事業を実施すると同時に、両者が進めている東アジアとの文化、経済交流の促進などの面でも協力していく。奈良を「酷愛」した會津八一がかな書の短歌を呪文のように石碑に刻み込んだ。會津八一が永眠してから55年後の今、その東洋文化のルーツを追求し継承する精神が新潟、奈良、そして東アジアに蘇ろうとしている。

#### 孫犁冰による翻訳

- 1) 李銘宗著『會津八一的最後十年』、秋芳會、2011年8月1日、第5頁
- 2) 李銘宗著『會津八一的最後十年』、秋芳會、2011年8月1日、第253頁
- 3) 李銘宗著『會津八一的最後十年』、秋芳會、2011年8月1日、第66～67頁
- 4) 李銘宗著『會津八一的最後十年』、秋芳會、2011年8月1日、第253～256頁
- 5) 李銘宗著『會津八一的最後十年』、秋芳會、2011年8月1日、第262～263頁
- 6) 李銘宗著『會津八一的最後十年』、秋芳會、2011年8月1日、第256～262頁
- 7) 李銘宗著『會津八一的最後十年』、秋芳會、2011年8月1日、第283～289頁

#### 参考文献

1. 李銘宗著『會津八一的最後十年』、秋芳會、2011年8月1日、308頁。
2. 會津八一著『會津八一全集』（12巻）、中央公論社、1969年6月20日。
3. 財団法人會津八一記念館編集『會津八一と奈良：いにしへの都のかおり』、新潟市會津八一記念館、2005年10月6日、88頁